

論文の内容の要旨

氏名：八馬朱代

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文の題名：石清水八幡宮の成立・展開からみた平安時代の神祇祭祀の研究

課題の設定

平安時代の神祇祭祀において、神祇令に定められた恒例の祭祀とは別に、九世紀頃から新しく天皇が主宰する公的な祭祀が生まれ出されていく。新しく作り出された祭祀は賀茂祭・韓神祭・平野祭・春日祭などの神社の祭がみられ、天皇が使者を派遣して幣帛を奉るという形の祭祀であった。恒例の祭祀である祈年祭は九世紀末に班幣の実施が難しくなり形骸化が進行していく。その一方で九世紀より祈雨・祈年穀などを理由に朝廷から諸社に臨時の使者が派遣されるようになり、最初は五畿七道諸国の名神が対象となっていたが、九世紀半ばより京・畿内の有力社と伊勢大神宮に対象が変更となり、十世紀初頭に伊勢・石清水・賀茂上下・松尾・平野・稲荷・春日・大原野・大神・石上・大和・広瀬・龍田・住吉・丹生・貴布祢の十六社に限定されるようになると指摘されている。このような新たな神祇祭祀の成立の動きは九世紀より始まり十世紀半ば以降、賀茂行幸、石清水臨時祭の実施、十六社奉幣などにより確立したとされる。更に、天皇の御願祭祀として成立したのが神社行幸であるとされ、円融天皇から後三条天皇の時代に神社行幸十社制が成立・展開していき、天皇の代始儀式として定例化していくとされる。

このように平安時代の神祇祭祀は、天皇が主宰する祭祀として成立し、京・畿内の有力な神社に限定して祭祀が実施されていく傾向がみられる。十六社奉幣の研究において、十六社がどのように固定化されていったのかについて検討されているものの、畿内の有力神社がどのような理由で十六社に選出されたのかについてあまり検討されてこなかったといえる。特に平安京の守護神、天皇の母方の氏神などのように明確な選択理由がある賀茂社や春日社などと比較して、石清水八幡宮の創立は遅く、どのような理由で十六社に選ばれたか不明である。天皇の御願祭祀である神社行幸においては、平安京の鎮守の神である賀茂社よりも先に石清水八幡宮に神社行幸が行われる。何故、最初に石清水八幡宮に神社行幸を行うのか、この二つの疑問について本論文で明らかにしていきたい。石清水八幡宮が畿内の古社に混じって十六社奉幣、神社行幸に加えられていくには天皇や朝廷からの強い崇敬が存在していると考えられる。石清水八幡宮は平安末期から朝廷に対して強訴を行い、膨大な荘園をもつような権門としての姿をみることができ、それを朝廷に認めさせる宗教的権威が必要であると考えられる。その宗教的権威は天皇や朝廷が八幡神の神威に期待して行う祭祀、庶民の人々の信仰など長い時間といくつかの過程を経て、積み重ねられて獲得していくものであると考えられる。その八幡神に対して天皇や朝廷は何を祈願していたのかを考察することによって当該期の八幡信仰の発展と天皇・朝廷や貴族社会との関わりを明らかにすることを目標とする。

一、石清水八幡宮の創立と境界神

石清水八幡宮は貞観二年頃に創立された神社である。もとは豊前国にある宇佐八幡宮（現在は宇佐神宮）の祭神である八幡神を、大安寺僧行教が平安京西南地域の男山という地に勧請したことに始まる。宇佐八幡宮は、奈良時代の新羅との関係悪化、藤原広嗣の乱、大仏造立への協力、宇佐八幡神託事件を通じて、様々な神の性格が与えられた。しかし、宇佐八幡神託事件以後、八幡神への朝廷の崇敬は低下していたが、薬子の変の際に乱平定の祈願が行われ、再び注目されるようになり、仁明天皇が即位した時に伊勢大神宮とともに即位を告げる使者が宇佐八幡宮にも派遣されており、それ以後、文徳・清和・陽成天皇と代々の天皇の即位の時に即位を報告する使者が派遣されている。このように宇佐八幡宮に対する朝廷の崇敬をみていくと、①乱平定の神、②对新羅の神、③大仏守護の神、④皇位継承・守護の神という神の性格を朝廷が認識していることがわかる。この神の性格は、石清水八幡宮へも引き継がれ、天皇の皇位継承問題、対外関係の事件、内乱が発生した時に朝廷より祈願が行われている例が多くみられる。

第一章では石清水八幡宮の創立を伝える二つの縁起を比較検討したところ、清和天皇・藤原良房の関与、縁起の構成、本宮と神宮寺、八幡神の表記の違いという四点の相違点を指摘した。その勧請の背景には幼帝で即位した清和天皇を巡って、その外祖父藤原良房が清和天皇を守護するために宇佐八幡宮の八幡神を勧請したと考えられることを指摘した。諸社奉幣において石清水八幡宮に関して二つ

の転換期があり、一つは貞観十一年新羅賊船侵入事件の際に特に石清水八幡宮に対して朝廷から兵革の危機を防ぐための祈願が実施され、この時期を境に諸社奉幣の中に時々加えられるようになった。二つめの転換期は承平・天慶の乱の時であり、天慶五年には乱平定の報賽として石清水八幡宮には臨時祭と同様の舞人・歌人が派遣され、一方の賀茂社には朱雀天皇の行幸が行われた。この時期を転機として石清水八幡宮は伊勢・石清水八幡宮・賀茂社の順で奉幣が行われるようになり、賀茂社と並ぶ地位にまで上昇したことを明らかにした。

第二章では斉衡二年に東大寺大仏頭部落下事件が発生し、鎮護国家の象徴である大仏を修理する際に八幡神に修理の祈願を行っていることから八幡神が注目され、同時期に石清水八幡宮の創立もあり、その後の石清水八幡宮の発展の大きなきっかけであったことを指摘した。また、地震災害と兵革の危機が重なると八幡神に祈願が行われることを指摘した。

第三章では天慶元年に粟田口にあった八幡新宮を本宮である石清水八幡宮が破却するという事件が発生し、新宮で奉られていた八幡大菩薩像が石清水八幡宮に安置された。このことは東の境界神であった八幡大菩薩像を本宮が手に入れたことにより西の境界に位置していた石清水八幡宮に⑤境界神としての神格を付与したことを明らかにした。

二. 神社行幸と女院の石清水八幡宮・住吉社行啓について

第四章では特別な祈願により石清水八幡宮・賀茂社・平野社に神社行幸を初めて行った円融天皇の八幡信仰に着目した。円融天皇が中継ぎの天皇であったため、円融天皇は自らの皇統を維持するために皇子誕生を願っていたと考えられ、「皇位継承・守護の神」である八幡神に皇子誕生祈願するために神社行幸を開始したことを明らかにした。行幸の翌年、円融天皇に皇子懐仁親王（一条天皇）が誕生し、円融天皇の八幡神への崇敬は更に深くなったといえる。そして、石清水八幡宮への行幸が計画された時期に円融天皇は石清水臨時祭と石清水放生会の祭祀に介入し、石清水八幡宮の重要な祭祀を整備していることを指摘した。一条天皇が即位すると円融法皇は一条天皇の守護を石清水八幡宮に特別に祈願している。一条天皇の外祖父の藤原兼家は神社行幸の対象社に藤原氏の氏神の春日社を加えようとし、一条天皇の守護神は石清水八幡宮と賀茂社と考える円融法皇と対立するが最終的に兼家の思惑通りに一条天皇は春日行幸を実施している。円融天皇の石清水八幡宮への崇敬は円融のキサキの藤原詮子（東三条院）、藤原道長、道長娘彰子（上東門院）に引き継がれたことを指摘した。

第五章では、天皇の代替わりの神社行幸の他に、一条天皇の時代の長徳元年に石清水八幡宮、長保五年に石清水八幡宮と賀茂社、後一条天皇の時の長元二年に石清水八幡宮・賀茂社に行幸が実施されており、当該期の政治状況、皇位継承問題、内乱などを検討したところ天皇の特別な祈願として長徳元年は「疫病封じ」と「政権の安定」、長保五年、長元二年は「皇子誕生祈願」、「乱平定」などの理由で行幸が実施されたことを明らかにした。また、後冷泉天皇の康平五年の石清水行幸が行われた理由は、病気であった後冷泉天皇の守護を祈るためであり、後三条天皇は皇太子時代に皇位継承を石清水八幡宮に祈願していたことを指摘した。

第六章では、長保二年に東三条院、長元四年に上東門院が石清水八幡宮・住吉社行啓を行っていることを取り上げ、『日本書紀』神功皇后伝承に登場する応神天皇、神功皇后、住吉神は対新羅の神であり、この時期、対外関係が悪化していることから対外的な危機が起きないことを祈願し、東三条院は一条天皇のあと円融系の皇統を継承する皇子誕生を祈願し、上東門院は後一条天皇に皇子誕生すること、平忠常の乱の平定を祈願して行啓を行ったのではないかと指摘した。

第七章では白河天皇の時期には石清水八幡宮と賀茂社のみ、毎年神社行幸が行われていることについて、白河天皇の特別な崇敬があったことを明らかにした。白河天皇もまた円融天皇と同様に中継ぎの天皇として即位しており、自らの皇統を継続するために「皇子誕生」と自らの皇統へ「皇位継承」が行われることを祈願するために二社に特別に祈願を行ったことを明らかにした。

以上の考察によって、石清水八幡宮に対する天皇や朝廷の崇敬の背景には奈良時代の宇佐八幡宮が獲得した神の性格が存在しており、八幡信仰に打撃と考えられた宇佐八幡神託事件も時代の経過とともに「皇位継承・守護の神」という信仰を生み出し、平安時代の皇位継承に問題が生じた時に八幡神に「皇位継承」や「皇子誕生」の祈願が行われるようになったことを明らかにした。摂関政治において藤原氏の動向に注目することが多いが、平安時代史を天皇や皇族の視点からみることも必要である。この時期の皇子誕生は、外戚関係を築く摂関家などの貴族だけでなく、天皇にとっても重要な関心事であり、清和天皇の即位や円融、白河天皇の特別な祈願により天皇家の神として石清水八幡宮八幡宮は諸社奉幣、神社行幸の対象社に選ばれ、伊勢大神宮と並ぶ宗廟としての地位を獲得したのである。